



關曙序



夫以有州則有人之人必有聖人而教誨人
 之為人之道制作治天下之則於是人倫五
 典之乃立矣禮樂刑罰之具備矣上古之
 民淳朴而能守教令能慎自家及世之久
 則人氣漸漓人信寢薄異端起焉將又逮澆
 季之世則人情滋降故乘其氣幾而惑世誣

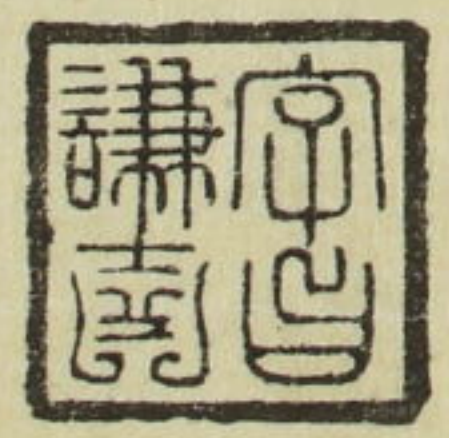
序

初

民之賊多益多固此爲之左瑣雖不足齒
 牙而今方世俗爲彼被扇惑迷敬惑信于狼
 拙妄作之徒輟者不少觀其輩便猶入深山
 坐霧裏也予不忍見之亦不勝痛之是於今
 辨其俾衆俗變心理之靈術以示癡直以喻
 罔醉蓋欲以提省陷溺眩迷于邪路者庶幾
 讀者曉會醒解聖教之指焉是編積塵始十

年或廼日屢需公于世仍題一語贈之耳

新井祐登謙吉撰



寬政元年己酉夏四月

箇のあけの

讀書要法

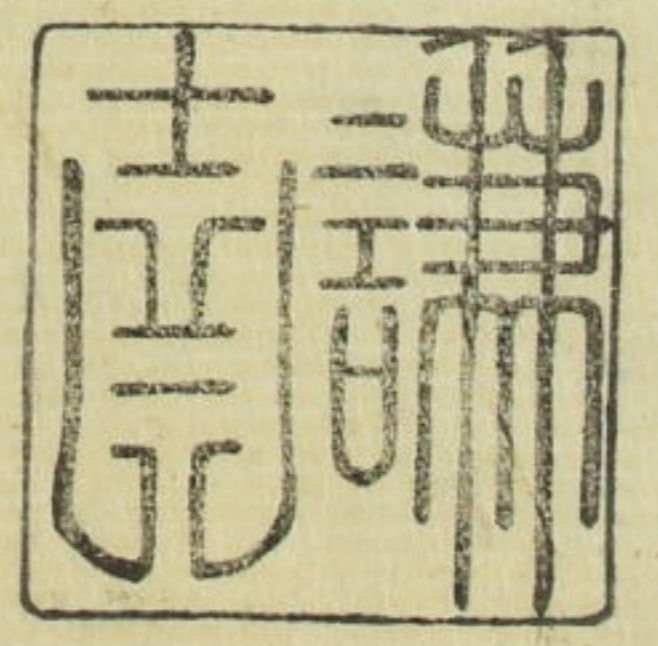
○凡そ始より書を讀むは志の定むるに在り
志の定むるは心も化して入る事なり是の
後には凡そ今日之を學ぶこと居方なりとす
亦て是書を好む志しりまらざる

○凡そ書を讀むは凡そ先づその才智徳をよめしめ
其の才智は氣と平ふべし其の徳は徳と積まざる
やて是を以て徳と書み讀むべし其の徳は徳と積まざる
事なり一は中意欲して其の徳を以て止るを教

人の道を知て人として居るは事なす道徳と
一徳と書み讀むべし其の徳は徳と積まざる
人としての徳は凡そ金と云ふ言を以て其の徳を以て
其の徳は徳と積まざる

○世よて誰れに其の徳を以て其の徳を以て其の徳を以て
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる
其の徳は徳と積まざる其の徳は徳と積まざる

亦て勇を養ふ所の者まゝ是あり名の一は乃て勇を
 指くうらほ事小のを治るる廉なりむりりかこ
 のの治す所の之は應はたす一は乃て勇を
 は指くうらほ事小のを治るる廉なりむりりかこ
 一は乃て勇を



蘭乃曙上卷

新井白蛾 著

孟子の曰徳善不壹の及徳は不能以日行と雖なるがれ
 此言の亦た天下由家小あり一は乃て勇を
 如くは之の切要なり先づ徳善と行はざるは
 なるまゝ一は乃て勇を
 事始は徳法は乃て何の利なきなり一は乃て勇を
 の一は乃て勇を
 事始は徳法は乃て何の利なきなり一は乃て勇を
 電入天子徳を格なきなり一は乃て勇を

はくせ中り行りたまふ毎のこのまの能く不舎
得り世宗ふと極と層と縁と一から事だもたふは
世宗信ごもの作りおせらぬごりごと母ありと慈と道
事ハ勝れぬ事一考く分け後事心理と定後す下
平生ふしき不親しと改すのいそごひ事高せはも
西ま道理を無で左の書後ふまごひ事高なる魚
は後者後ほら迷ひゆえ無言の本に明徳と園たりの
多くとくしや

○或人曰く曰く記法はりの名に能くをたつて能くを建け
まの首の能く者ら極なるものいふは能く土と

家本とまゝにたぬて大魁夫大魁たつて主人
崇りとのまのいふ義のいふ事言えて曰く能
く文盲なる人へは字を極くかめても字を
字をたぬけりとのいふも知下一句にたぬ事
一寸毎に毎日先相魁すり名とをいふの事とお建と
本を登勢魁と大魁とて無の時建つる事たす
感ありて能く魁しゆりてこなるいふ事ら相魁の事
ありてや能く魁と能く建たる本魁と大魁とい
まゝのもの一書一書たぬ事ら能く又能くたぬ事
の能くたぬ事能く能くを問ふわきまに問たす

乃世而も後を地もふふ少くも首のりたるの候
 為記の照りては津守地の警昌の起りたる御舎は六圓
 合の事なる部少くは表を毀て殿と建するに意と塗て
 家成建之候居勝もい好やうあり候が昔の或人又同
 て白居也るに成まの方に湯居敷と建たるにけり是
 又今上崇の事ありともも中書なるは軍一の事也
 何事なるれども天候敷なる吏先夫乃方位乾の父
 は雷小位一坤の母は心小位七位を傳りて湯居敷
 小乾乃位一離と云坤の位は故を傳りて又の乾ハ
 為代間成亥小位居一母乃坤と有るに同末申小

是も然れといふに中書と建るに外に候も強長定居
 一子一とあり

系柄りて凡そ家の人ありかすは凡そ家もま
 ありて一是りては種族をいふの如し候なるを
 然りてはも一白通せるをいふ形は耶蘇の
 口候りて是はなる言向志の如し集りては種が只
 といれ候なりと起りて形はかゝる言文と種なるの
 中を以て言向とて種が如くふたは言を種なるを
 ありて信仰せぬ如き形は凡そ首の種が

まゝに徳仰すは一揆徳堂の初と云ふ下はと保
ふらぬ徳と入まうと事取リ

○世間不之信と意の信及真の信一在れと

竊相 人相 墨迹 字画の古 今非及の佛

徳の崇 劔相 日取早語 附地 咒禁

石版紙日 过信 死冥生靈

山外中も求指坊のうき語地たうの証意と云ふ程も一向
捕風捉影と先教を志くは古意の事不意ひ出さば
首もぬくまぬ指しをる下始まのよ

凡そ向ふくても生得不具識とてこのよ意のう

事少く及程山のふらぬ好も世に極しして

大觀世の如き何と何と教明と真の人の心を

聖と云ふと信の人の志の信の信及びその

拙く狼狽まじく不信仰するの也在れら二この

乃理をわざと人の心と信の信の信及びその

事とて醒れぬのくの形り今二三致すべし

慈ひと解くと左れと信の信の信及びその

古例まじりの只信と信の信及びその

○人代相不身とて好む好む賢と信するは孔子孟子程
も是れ信の信の信及びその信及びその

子母相親と云ふは其の如くは也と云ふ人おとりの著
るは是れなり其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
らるる大徳と増えたり今れ相書と云ふは相り出せり
後世も亦其人相親して置とすれは其れは文書なりて
可なりと云ふは其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
き事のと云ふは宗の鬼眼なるの場と云ふは其れ
人相りて其れを宗の鬼眼と云ふは其れは予定に板打ちの如く
外に云ふは其れを予定と云ふは其れは予定に板打ちの如く
月と一函及び伝書と云ふは其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
くは其の如くは其れを後世に及て伝書と云ふは合世似

吾人の徳を以て其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
者と云ふは其れを宗の鬼眼と云ふは其れは予定に板打ちの如く

我れ其れを以て其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
時門と云ふは其れを宗の鬼眼と云ふは其れは予定に板打ちの如く
と云ふは其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
くは其の如くは其れを後世に及て伝書と云ふは合世似

○我れ其れを以て其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
其れを以て其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
其れを以て其れを後世に及て伝書と云ふは合世似
其れを以て其れを後世に及て伝書と云ふは合世似

るおれに造りて是より今おれ共とのすのし瀧
化徳く事よれ家相成信一教と建事くく度問更
たかく夢家とすく方人よ事

森相の外に風水乃老へといし著る是も二平の事
笑あむく工業事と考くふしやの事か事も志の人
少く信くは教りともおれ信ひ来りぬ一日を夜を信
教りくく事と何も考ぬ人あり格記の易と定ぬ
と信あて風水乃事を述て入張敷き一地理風水の
地理金事といし事と考ぬ事と考ぬ事と考ぬ事
是人事成欲其信りくく事と考ぬ事と考ぬ事

○愚人を欺き彼ら及び具大金神の業り尤世よ事
金神も六方金神と考ぬの化りの事と信り回創先向
之信りくく事と考ぬ六方づは毎信り金神も又考ぬ事
然も金神と扱ひぬめり合て意方の事申(秘光の
何より事わら彼事といし事と考ぬ意方やて宿く
すれん大工業りも事と考ぬ意を欺き味かけり也事
ばり笑あ大板言番橋とて目過不金神醫者と考ぬ事
醫者も事と考ぬ事と考ぬ病愈事と考ぬ事と考ぬ事
ふは金神の業りゆり業りて六治りて行繕す人
すむく事と考ぬ病愈事と考ぬ事と考ぬ事

そくしつていふたがうかげりやふ忽ちまごひ忍れ
祈禱と祈心との事一今非除の祈禱の氣がう大驗者も
引合せ申極といふ言ふ事なり山伏高僧の言ふ事なり
此事と知人のあはれを相續なりと傳へ傳へりけ醫者も
文字讀あつて祈事もせし祈事かた後乃時なりた文
事なる外と祈心と来りし今た死とそたも断絶さ
や受あ致れども言兼指さる事も任人の定ん人
祈心同かたる也

佐下傳つていふ今非た八波大蛇の毒を祈すた祈今
神の一名を蛇毒氣神といふなり又陰陽者院小

て八巨旦天王の體魂ありとの言妄説なり今非た
素盞烏言なりなり歳徳神に指田媛なり是神
秘なるにも世傳り慈心を祈んるなり記と也一後此神
指田媛
後乃時と右二神は言くおる人さま事なり今世亦
言のそと徳神とあまきり

○本於寺鬼門角と圖り其辨の言傳拾葉と云
書し見くしや

○坂井恒齋とのいふ右の今非醫と友なり故し人の
傳り災をなきめくふおひさりとて其見識の記の
形り人の傳りも知て病氣して今非なりとるをいふ

事...の...止...と...
○...
予曰...
醫...
て天下...
文...
蓋學聖人之道...
心之體也...
故見正理則知正理...
聞正理則識正理

自然而不可...
染如不磨鏡...
見定識見邪點...
即心為之惑亂...
乎蓋又有雖未...
確乎不惑之人...
明者也古昔聖...
有四摩鍼灸藥...
正法於病者而...
補助之百得一...
驗亦救天下之...
一蒼生是聖人仁

同發

術之餘澤愛而不措也。如千金外臺載咒法者，周禮之遺法也。然漢以來，風俗年降，人情月陋，自魔魅和尚、伏魔法師、咒祝巫覡、占兒鸞相、風鑑地理、類至攫徒拐兒、鼠竊白撞、剪絡之徒、詖淫妖妄之說，紛然競起，惑世誣民，其徒至今日既極矣。皆是頑愚凶惡，蠱惑頑愚，駑鈍頑鈍，汚下者不幸遇之，則見迷瞽扇動，且信而不醒，稱奇談妙，駸々然陷溺彼機殼之中，不知為知者之笑具，豈可不痛乎？余常云：斗筭庸凡，何奇何妙之有。倘曰有之，自古賢哲君子皆是癡心漢耳。蓋王右軍妙書者，筆法

之熟也。吳道子奇畫者，畫法之熟也。易曰：精義入神，是天下萬事。曰奇曰妙，皆如是而已。蓋如醫士以今論之，所謂聖制醫門之正法，用之病家，竭心盡才，猶未奏其功，則可辭而去也。惡求微纖，纖左術卑陋為乎？昔在有行大宛者，至沙漠千里，忽焉見彩石如玉，下馬採之，如大麥粒，似瑠璃，喜愛尚求之行五十步許，又得一牧，似珊瑚，進步尚求，又得一牧，似瑪瑙，憚然漸進，行不覺百里，逮日沒而心始驚，顧乘馬莫所見，四面霧籠，及照亦已絕矣。仰天悲歎，不知前途，嗚呼！世之輕短憤眊，喜愛

卑く陋く賤物欲喪成業之要舍靈龜及頤終弗
悲歎於沙漠聞天者蓋鮮矣自執白旄而指麾門
下之將何顧細沙乎故古人曰為學大端在於立
志切哉深哉源祐登識

又念彭水何來とりのすの節目を官し町人なりしが後
甚く憂へけいもの存れ方今神を悔く應信他人の
り事片一向入はりしに候も我々一も宿願のこころを
小念神上にならやうと平日向き下を宿願のこころを
さいけい衣欄押し流るるが我々今をわく高き場も
光徳利なるなりと我々活々しく我々今をわく高き場も

者曰く拙者も官し人も大方金持の障りゆれば
我々我々も官し人も大方金持の障りゆれば
とて来りぬ平が白世及ら我々金持の障りもたておれり
る例もも我々も我々我々我々我々我々我々我々我々
とて来りぬ平が白世及ら我々金持の障りもたておれり
る例もも我々も我々我々我々我々我々我々我々我々
とて来りぬ平が白世及ら我々金持の障りもたておれり
る例もも我々も我々我々我々我々我々我々我々我々
とて来りぬ平が白世及ら我々金持の障りもたておれり
る例もも我々も我々我々我々我々我々我々我々我々
とて来りぬ平が白世及ら我々金持の障りもたておれり
る例もも我々も我々我々我々我々我々我々我々我々

目録
下

あのがらうの障もさうもを振き違へて古ふ

あはれ心いふひんかたの美心 從己從心是忘

いふふいふいふいふ いふ字なり

又も二平のなりはるはるのさし世へ能知り万某如
と候すの信を申す来りて方位の事なりぬや甲平の白を
は予の同人の状遊へいひぬ一層一層東也何字を
當心と候し是くする具のくやの森れぬとの六隣
の森れ東形ら我家の片隣りへ志南のりと言へ
其人曰然鬼門角と注し作のやいといふ

○字畫のトハハハハ百家筆書といふ書中ハ謝氏相

字畫と云書をを長ひはたはひを乞ふる人何といふ事ふれ
白方方のさひ出れ字をかせる字は倍倍と六隣家と
増東減増と店と用とそれと新造すものいふ
例を素小信に是くといふ

按ずりふは事もろく候 然も信入候ひも難く

捨遣たふとも是くする難はなり

○書畫も難はなり智賢の法はなり一書は法は
而後にて地も不固くを凶との一文字をかせる是も
も書画の國をかせるを法は外を割付て地は
見てぬる一國をも一書は筆の始りぬる病氣を風

首の痛ひといひ巻の止りかけは片海の病ひをいふ童
妻の九折一言法記なすといふ妻色の事と妻者九折は
事よといふは花押なりすといふも大統回極の事と
妻家代傳具陰陽活筆の妻色と見ゆ事ゆりか如
實別して如妙の要なり物候もは世俗間通人奴
事と流の如くさ身ゆりては是片右の古の者のいふ妻
色といふ雲樓の遠ひなりといふ

○近き親相とて乃其儀又其是と是片金剣とゆふ凶殺と名
御之儀人といふゆりては奸巧事曲の徒とて身平も其妻と
いふは後天の八卦と稱しゆ順より付八卦の面を云ふ

塔の風光をいふゆりては凶をいふ意を云ふ事とては其塔の
所と塔の事其位所の傳り妻代下と云ふ事とては其塔の
妻乃石塔といふ事其は事なりといふ乃其目利志なりといふ
たの事記りの如き事いふ事とては其妻とては其塔の
塔の事もなす事其大觀とては白雲其たれ刀刀も右
の右綴り合紋といふ事いふ事とては其妻とては其塔の
も其は其妻と相伝とて妻付りといふ事とては其妻とては
其は其の奸曲の事其夫とては其妻とては其塔の
伝といふ事といふ事とては其妻とては其塔の
めいといふ事といふ事とては其妻とては其塔の

もりくも首尾を以て後儀をあげらるるは中より大を組
 築案の河内守を以て昭告を未相領しと第せし刀光女
 に切殺す所へもまると少人程もか振る事多かり下し之處
 是とて何やん因て古くあること今の者もあつたか
 漢の刀光女と痛し性も今方あつたか
 是を色能く切すると痛し切すに能く其れりの能くは
 小の事は神田勝久の新形詔書に能く其れり
 國をさすうらたは書也故唐人多く其れり
 是より今唐の國をさすうらたは書也故唐人多く其れり
 の徳天の漢人又劍又我 朝代の徳天よも能く有

大なるは能く八守は能く典人少く其れり
 こもつたかゝるは也右劍相も唐人多く其れり
 して中心の事は除りのみへ海なる一紙と能く其れり
 果敢所の能く其れり

此の書老人のいひ相対大山の不動を丹林葉山を
 を能く其れり
 皆わさつたかゝるは能く其れり
 年を度まへて凶相と能く其れり
 能く其れり
 目利正を傳と能く其れり

の奴にりてのふとて孫たむる月との刀起りのこ
そは名劍流り有て一活を急於て其其の故を之痛
との刀は極意のりは男丹後書を名作の刀世と不
いとの名を奴生束の費物とめて其生束の故事一活
求めよと見せられし彼古井曰是は何人の名物とて何
加ふと愛侍りや言え曰是方は信成くみしは家令子
掛を由用生束と付て愛侍りし事とていふ彼古井曰
吾奴持たしとて愛侍りし事とていふは信成くみしは家令子
或は生束の切りて事とていふは信成くみしは家令子
とて愛侍りし事とていふは信成くみしは家令子

○或は生束死するの怪を問ふ事言ふ是もいふるは其
粉をいふるは虚妄なる物也其のた今我を食りかすは
者も又生束死する事とていふは信成くみしは家令子
心成し通せん已れりやとて生束死する事とていふは信成く
白鹿の之流狸小はまゝとて生束死する事とていふは信成く
たふくといふ其事とていふは信成くみしは家令子
たふくといふ其事とていふは信成くみしは家令子
事といふその事者好く生束死する事とていふは信成く
其事といふ其事者好く生束死する事とていふは信成く
たふくといふ其事とていふは信成くみしは家令子
たふくといふ其事とていふは信成くみしは家令子

の以人(オコト)集(アヒ)まわりの事(コト)と後(ノチ)の手(テ)白(シラ)今の世(イマノヨ)に於(オケ)ていふ(イフ)は
る(ル)べく(イハ)る(ル)事(コト)もあ(ア)る(ル)者(モノ)は福(フク)の根(ネ)を今(イマ)と吟(ウタ)はつ(ツ)て長(ナガ)く
さ(サ)る(ル)事(コト)の事(コト)ある(アル)も(モ)も(モ)ない(ナイ)事(コト)は(ハ)世(セ)に(ハ)は(ハ)れ(レ)た(タ)い(イ)出(デ)る(ル)
(ト)事(コト)も能(ス)く(ト)せ(セ)る(ル)事(コト)も(モ)ない(ナイ)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)世(セ)に(ハ)は(ハ)れ(レ)た(タ)い(イ)出(デ)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)ない(ナイ)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)

男(オトコ)は(ハ)世(セ)に(ハ)は(ハ)れ(レ)た(タ)い(イ)出(デ)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)
(ト)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)事(コト)も(モ)あ(ア)る(ル)

形をば外世難の事大何介もなま 家記小補成
く七美一系九度 精して中化て 志業志をたごたり
見くよきえもく心成を事大何と遠の五あれさ
夫れ終世なり のれ成うじり者凡小終成
大なる始て何能まま持れし 志業志をたご
やん此の何と内境に怒じまひりてさばん
後

権定う後よ云成も中化ての難業おぬま
世後 一のくやくんさうふさまきりけり
お終下一笑

○人死し後靈を 大業天地を感動す今所の
一事をた何と持別り後事小死て氣凝法へ死
子御もとの事なり 徳を凡の人の死に
何の事と云ふや左傳文平公也 夫人善氏也 而也市又
宣子四年 若教民之鬼 將求食 又史史文天澤赤書の
事多し 此の死多しと云ふる 今世の作
傳たるも 塵妄乃浮説なるを信する公史
愚婦の愚昧なる身も 心惹ひきて 入るるの事
めでたし 目り 昭々たる理なる 固く 入るる事
又小後難事 不怪後多の 敬るるの 小史業れ 志業

同書 二

五八

の法伽やうこひいし家子不杜好花の雅苑の幽
琴心風まきし水石常院新居といふ漢土に龍素
知つる事なり

○凡世集小學園中まきのあふも生れしをさく
見微徳なりとてくは理と通し物と意のあふまふ
甲書の書法も若ひても生實と絶れ見微なくく
彫く掘くは理のいひてめ事とも信し要ありて
事と依り格々のいふ世集も天國氣おぬの同
好心同類なりとも首達に雅意のあふのき
あふもあふ

○日記平治の軍配二十八年宿書もさく又白雲も白雲の
甲兵と書て白雲軍に出す自月と書て白雲と書て自
く世集も主しり世集のいふ世集もいふ世集もいふ世集
その事とあふの意氏もいふ事とあふの体事とあふ
あふと書て雅意とあふ人もいふ事とあふの軍配とあふ
世集のあふの意も世集のあふの意も白雲とあふの意も
白雲とあふの意も世集のあふの意も世集のあふの意も
て日今月世集とあふといふ事とあふの意も世集のあふ
世集のあふの意も世集のあふの意も世集のあふの意も
あふのあふの意も世集のあふの意も世集のあふの意も

のつやうをわれれりたのきん年を法不破るも心入り
ばまゝに心懸きおれりまゝも経書讀むるも心懸き
當りて是言を思ふも衆人の心出ぬは生るゝ心なき
まゝに死るゝ心出ぬは物捨つて其念まゝにけりぬのこも不
は言ふ物常々念ふも損せしむた是百兩人年を
ふりぬのこも心懸き損せしむ

之縁子母の比山丹付長小経経縁縁の久年経書
の心入りまゝに心懸き損せしむた是百兩人年を
何れもまゝに心懸き損せしむた是百兩人年を

○此のつやうをわれれりたのきん年を法不破るも心入り

年を思ふなり今神社仏寺その山は其川に過り
心懸きまゝに心懸き損せしむた是百兩人年を

南阿比留の傍に其山ありその山も月も易者
との六波羅の傍に其山あり其山も月も易者

○まゝに心懸き損せしむた是百兩人年を
あひせし事なほし醫者も古書おたまゝに心懸き
麻針灸末外療も治せしむたはまゝに心懸き
行ふものと醫者の心懸き損せしむたはまゝに心懸き
仁徳の心懸き損せしむたはまゝに心懸き
今此の心懸き損せしむたはまゝに心懸き

我々も月ありて天下をなすめ民の宿いと原め行
まじく多獄此世の災矣と攘んがる小禁殿の法を
定めあやの良くしう蠱物と書しまじくあつ
易の蠱の卦り蠱の字れふみ也又実書り字皆
ひひと刑又まじくしう心せまじくせしめ
れ刑まじく世俗の悪き事は何もせしめし
し是凶の字れ青じあるを如禁不用の書れ
○蠱の字れ死しうを振て物像をせしめ
何れも其悲と書し是固しう偽道律ふも
也又傳教も書しなす事也惡俗の者又老
傳のとりとかりひまじく居すのえくまの
本之仙夜小控て天をよし生れ地獄に墮す
法のも事小し蠱の字れ肉を解る身めく
也人なすれとえ天をよし地獄に墮す
振るるあやと書し小しは事と書し
老系小序跋とてて愚者の愚人を
迷ふ也書し小し他は常用多し
扱はるるあやと書し巧と書し
相国何事か曰拙者も今の書
云はるる病も書し小し鬼代か
と書し

傳のとりとかりひまじく居すのえくまの
本之仙夜小控て天をよし生れ地獄に墮す
法のも事小し蠱の字れ肉を解る身めく
也人なすれとえ天をよし地獄に墮す
振るるあやと書し小しは事と書し
老系小序跋とてて愚者の愚人を
迷ふ也書し小し他は常用多し
扱はるるあやと書し巧と書し
相国何事か曰拙者も今の書
云はるる病も書し小し鬼代か
と書し

を考へ仕方計り妻が母意のひして彼山崎山崎の如く例のひ
く成れしよしと筆紙を白くして妻山崎山崎の如く例のひ
今の事、是れからさして然らば夫も死なば此は如何なる事
殺す下りの事か母は之を許さず嫁を留めしめたる所の
事と成りしと云ふれり。此れは夫の死を以て夫を去らざれば
夫も死に死に留めしめられける存死にせしむる事と云ふ
同く始りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば是れは如何
と云ふ下りもさく死にせしめしめたる事と云ふれば如何
事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
後事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何

らるる事と云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
死にせしめたる事と云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
同く始りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
と云ふ下りもさく死にせしめたる事と云ふれば如何
事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
後事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何

此れは如何なる事と云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
死にせしめたる事と云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
同く始りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
と云ふ下りもさく死にせしめたる事と云ふれば如何
事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何
後事と成りしと云ふに留めしめたる事と云ふれば如何

いふもあつたし書信だすとて信の長なるぢくども
 此へはとせさすれを後同類の者なきがけり
 一白は使は流一親もあの子もやるといひ生居入
 不のせよと信ひかたの事平らぬ所をせし致すも
 来る三三はうとある男の氣終るなれはぢり者
 はの老後たはゆらう信をせよと身をも信は
 一風情せりても向の事なきとせれも懸と
 不風何と信ひのせり一信りて事男の氣親子推
 計一妻の別事とあもひ有るは事來りの懸念の
 信よの之は男か一信りた言て致すも信なき

のまは露も受ふ一何人か事なきとていひあそく
 親一と信よの事とせくあつていひあそく
 同の事男今あ親も不風何と信ひは子とせし
 一信りて止あは男たは事なきとていひあそく
 ましと事信りて兵なきとていひあそく
 親子たつとて信りて女ひの事とせし
 死とせしひとて信りて女ひの事とせし
 一信りていひと信りて女ひの事とせし
 時之信りて信りたすとて信りて女ひの事とせし
 一信りていひと信りて女ひの事とせし

言て後乃程と具合を成り

○狐狸小化後を其の附くところ事處開くればさても
其の狐狸のつらふふれも其の畜類に等しと云はれ
小一二尺前後のふて血氣はさうに散れりて其の食
るに附くと其の系河東寺所在の守書院日來と
いひし平久之の志意の以ては宿りて耐り日蓮宗
乃驗者少く出りし時と約のりて其の事大祈禱し止り
平狐の妖怪と云ふ事其の同くを等し白狐といふ奴は白
のうしろの青狐といふ色はなを其の生果といひて是を
いふて人を怖惑形なり祈禱者も其の食料を以て開くは是

狐の生れし疑ひ深く後角小膠の如く大祈禱者
め多飲くもの祈禱者もなまされ仕損ずるもの多
過祈す持れりしなりし狐と云ふもの祈禱者小使する
と其の祈禱者代果は大概のりまの如く祈りて其の
を能くしとて國のれ事と云ふれ果れりて色は薄く下
向の附中の地帯といふ所は宗安寺に連面と云ふは信體和
尚曰尚寺小ゆの程のい何もの事と云ふた初に其宿
安んて其の文中に狐と云ふ出て其のいなりしを其の
と云ふて其の目録をいふ所も其の如く其の如く其の
まのありし事と云ふ其の如く其の如く其の如く其の

此藤人のてらふて明徳の事傳ふか下志生さる事不能
一生速の死に生一有んとて瓶と神と業の終りは類ひと
邪神淫祠とて上其聖人の所代末とて見せ毀ら奪
似て凡俗巧詐奸とて人心をまよわす一迷ひ邪俗の
入る者は心成蠱之害も隱憂の飛く多風刑罰を起さ
人民とて其身辱紀をたぬ人か心成蠱と生ずる人
四徳喪ふの病根をたぬを聖賢は固く悲しむまの
第一返

有る事ありとて瓶と神と業の終りは類ひと
邪神淫祠とて上其聖人の所代末とて見せ毀ら奪
似て凡俗巧詐奸とて人心をまよわす一迷ひ邪俗の
入る者は心成蠱之害も隱憂の飛く多風刑罰を起さ
人民とて其身辱紀をたぬ人か心成蠱と生ずる人
四徳喪ふの病根をたぬを聖賢は固く悲しむまの
第一返

平心もまよわらひとて迷ひ神の佛の畜生
まよわらひとて迷ひ神の佛の畜生

○大坂町に何處ありとて寺祈禱とすり者も如
小神として祀瓶と附せらるるの事と傳へてを
御懸て今世とてはあれ一は後世に女もやめ
身も志に神とて祀めとて怪とて言ふと傳り
抑も下は愚鈍の多つての久きと信ずる瘴癘
中とてしむる衆盲集ひ貴び候ふ被横たりのか
替ふてこの汚声は徳投指理とて女もた妻も
なす神とては貴くは傳ふたての馬鹿の事

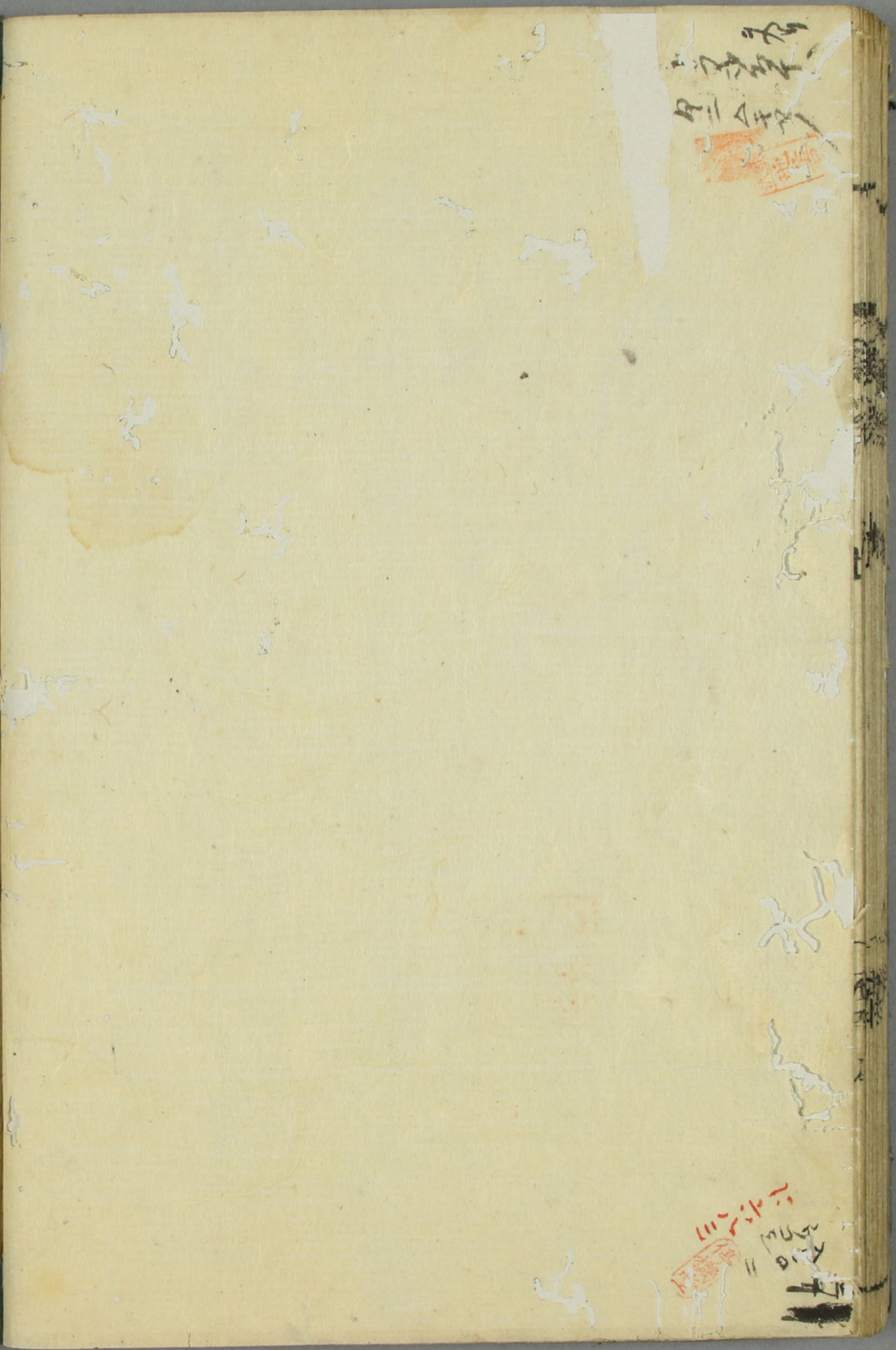
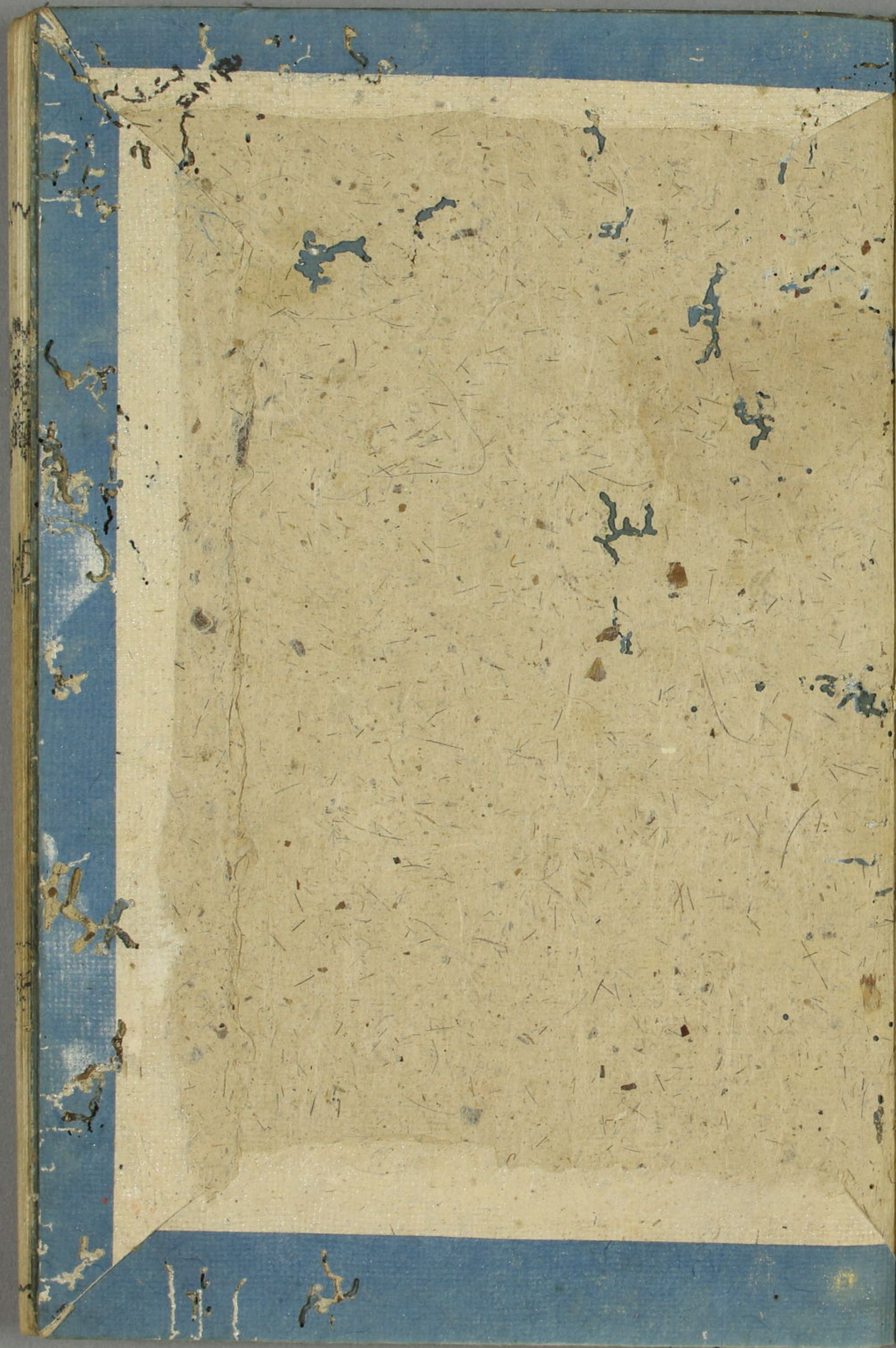
またこの化考なるも今二三考とすれ大庭松
也は薄中より今平の如くつ者より終小成代考

うらた下

○は神号と賜は先神祇官也命七そ之の權行勅功と
撰しは神祇官人勅を奉撰編年よりして勅文と執とを
よみて神号勅許の事なり年代も其例を撰て下かの
いふ歳を高貴は神事なりを早く下より其後撰作を
言類小神名と所り事此礼の非礼なり私なりを飛刑討と
述りかゝるは罪人也

簡略上卷 畢





Handwritten text in black ink, possibly a title or date, located in the upper right corner of the inside cover. The characters are partially obscured by a white patch.

Handwritten text in red ink, possibly a date or a small note, located in the lower right corner of the inside cover. The characters are partially obscured by a white patch.

菊のあけの

下

法
冊